

唐代以前における 三叉トチンの変遷

はじめに 中国では陶磁器の窯跡の発掘調査の進展に伴い窯道具や窯遺構など生産関連資料を扱った研究も増えつつある。しかしながら、広域的な比較検討による生産体制・流通形態の研究は立ち遅れているのが現状である。こうしたなか、熊海堂の研究は、中国のみならず日本や韓国も含め、窯跡遺構・窯道具の集成にもとづき、陶磁器生産技術の歴史的展開を述べている。そのなかで、三叉トチンが三彩と白瓷の生産窯に見られること、さらに河南省鞏義窯跡と陝西省銅川黃堡窯跡で用いられる三叉トチンの形態が異なることも指摘している¹⁾。巽淳一郎は、三叉トチンが北朝から隋代の灰釉陶器窯（いわゆる「北方青瓷」窯）とともに鞏義黃冶窯跡などの三彩窯でも用いされることを指摘する。さらに北朝から隋代の山東省寨里窯跡で用いられる三叉トチンの一部と奈良三彩の三叉トチンがともに両側に突起を有すること、全面施釉（満釉）の製品の場合、釉着を防ぐため上下両面に突起が必要であることを指摘する²⁾。

筆者はこうした先行研究の方法論を継承し、南北朝後期と唐代中・後期に中国全体において窯道具のセット関係の変化があることをあきらかにした。さらに、唐三彩窯で用いられる三叉トチンの前身となるものが南朝期の福建省懷安窯跡等でみられ、それらが北朝後期の山東・河南北部・河北南部で出現する「北方青瓷」窯を経て唐三彩窯に導入されたことを指摘した³⁾。

窯道具は世界各地の窯業生産に共通して用いられるものであり、技術伝播論のみならず、陶磁器の生産体制や流通形態、さらには中国における唐三彩や日本における奈良三彩の成立過程などの重要な問題にも関わるものであるといえよう。とくに三叉トチンは唐三彩と奈良三彩で共通してみられる窯道具であるとともに、「北方青瓷」窯や華中・華南地域でも用いられ、窯業技術の系統や工人集団の動向をあきらかにするうえで重要な文化要素であるといえる。本稿では、前稿発表後の資料調査等の成果にもとづき、唐代以前の中国における三叉トチン、および施釉陶器に残る目痕（窯詰痕跡）等の関連資料を取り上げ、三叉トチンを用いた窯詰技術の変遷を検討する。

山西省侯馬鑄銅遺跡 管見の限り、中国において最も

早く三叉トチンと類似した土製品が出現するのは東周時代の青銅器生産遺跡である山西省侯馬鑄銅遺跡から出土したものである。三角形の平面形の先端に突起がみられる⁴⁾（図69-1）。筆者は2019年10月に山西青銅博物館展示室にて実物を観察し、報告書で図示されるように突起が両側につくことを確認した。先端部には自然釉などの痕跡は確認できない。同遺跡では鋳型や土器を焼成したとみられる窯遺構も検出されているが、この土製品と窯遺構の出土地点は離れている。本例が土器窯の窯詰具や焼台であるのか、あるいは何らかの冶金関連遺物であるのかは現状では不明である。

陝西省長安漢墓出土施釉陶器 前漢時代の墓地から出土した施釉陶器のうち、罐の底部・口縁部の3カ所に目痕がみられる例がある⁵⁾（図69-2）。筆者は実物資料を未観察だが、巽淳一郎は土玉（小餅泥）の痕跡とする⁶⁾。

山西省大同南郊墓地出土施釉陶器 北魏時代の墓地から出土した複数の施釉陶器底部の2カ所もしくは3カ所に「支釘痕」がみられるという⁷⁾。筆者はこの資料も実物を観察できていないが、報告書の図（図69-3）を見る限り、長安漢墓例と類似した痕跡のようである。

浙江省越窯跡 越窯跡では後漢代に円形の土板の3カ所に土玉を付したものが出現し、やがて先端が尖り円板と一体化したものになる。魏建鋼氏は後漢代のトチンは手ごねによる成形で、三国時代以降、型（範）による成形がおこなわれると指摘する⁸⁾。

福建省象山窯跡 後漢から三国時代の灰釉陶器を焼成した窯跡⁹⁾。2017年12月に福建博物院文物考古研究所にて実物資料を調査する機会を得た。円形、もしくは隅丸三角形の平面に3カ所の突起がみられる三叉トチンが出土している。筆者が観察したものは先端部分含め、釉の付着は確認できなかったが、手ごねによる成形痕跡を確認した（図69-5）。越窯跡出土のトチンと同一系統のものと考えられる。

福建省懷安窯跡 南朝から唐代の灰釉陶器の窯跡¹⁰⁾。2017年12月に福建博物院文物考古研究所にて実物資料を調査する機会を得た。隅丸三角形、円形の三叉トチンがみられ、突起の先端部分は釉が付着し、実際に窯詰に用いられたことが分かる。成形は手ごねによるもので、型成形の痕跡は確認できなかった（図69-6）。

小 結 前稿では懷安窯跡で出土した三叉トチンを北

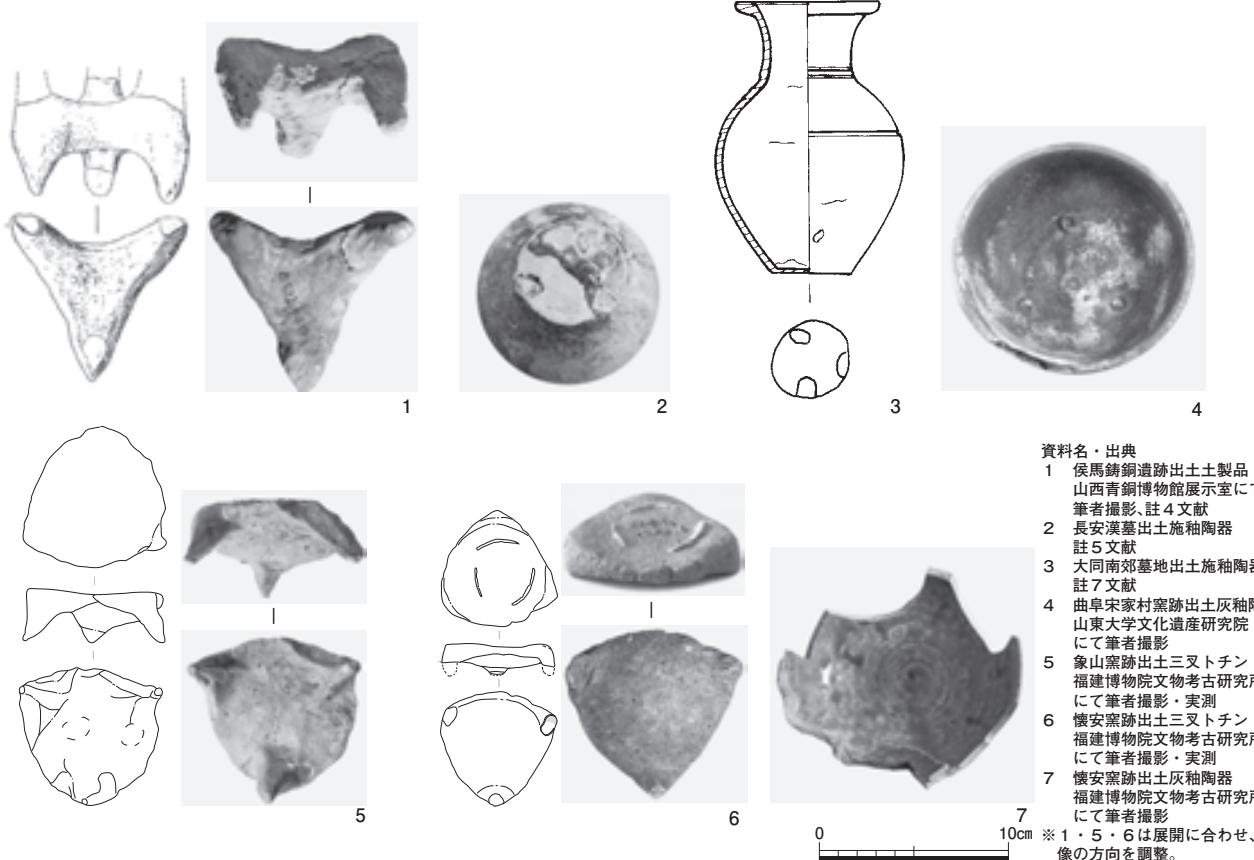


図69 三叉トチンと関連資料 図は1：4

朝後期に華北で出現する三叉トチンの前身と理解し、灰釉陶器の技術とともに三叉トチン等の窯道具が華北地域にもたらされたものとした。ただし、長安漢墓や大同南郊墓地などの華北地域の施釉陶器にみられる目痕については存在を紹介したのみで、その位置づけについては評価を保留していた。

前稿発表後の福建博物院文物考古研究所での資料調査では、窯道具とともに同じ窯跡から出土した灰釉陶器(図69-7)を観察し、華北地域の北朝後期から隋代の灰釉陶器(図69-4)と同様な三叉トチンの目痕を確認した。また、碗を中心とした器種に三叉トチンが用いられる点等、窯道具とともに窯詰技術も両地域の灰釉陶器で共通し、浙江・福建一帯の灰釉陶器の技術が三叉トチン等窯道具とともに華北地域に伝わり、いわゆる「北方青瓷」が成立したものと考えられる。長安漢墓・大同南郊墓地出土施釉陶器の目痕は、これらと形状が異なるとともに、罐を中心とした器種でみられることから、「北方青瓷」に導入される三叉トチンの技術とは異系統のものであろう。ただし、北朝後期には灰釉陶器とともに鉛釉陶器も同一の窯跡で焼成され、窯道具や窯詰技術も共有される現象がみられる。南方由来の灰釉陶器や窯詰技術とともに、漢代以来の鉛釉陶器の技術が北朝後期の陶瓷器の技術的基盤となり、やがて唐三彩に代表される唐代の陶瓷器に継承されたものと理解できる。

本研究は公益財団法人高梨学術奨励基金 2017年度若

手研究助成による成果の一部である。

(丹羽崇史)

謝辞

福建博物院文物考古研究所の資料調査では羊澤林氏にお世話をになった。実測図・写真の掲載にあたり、福建博物院文物考古研究所・山東大学文化遺産研究院・山西博物院にご配慮いただきいた。冀淳一郎氏からは貴重なご教示をいただいた。記して御礼申し上げる。

註

- 1) 熊海堂『東亜窯業技術発展与交流史研究』南京大学出版社、1995の116頁。
- 2) 冀淳一郎「窯道具から見た我国の施釉陶器の起源」『奈文研紀要 2006』。
- 3) 丹羽崇史「窯道具からみた唐三彩窯成立・展開過程－三国・晋・南北朝・隋唐期における窯道具の基礎的研究－」『河南省鞏義市白河窯跡の発掘調査概報』奈文研、2013。以下「前稿」とする。
- 4) 山西省考古研究所『侯馬鋳銅遺址』文物出版社、1993の図227。
- 5) 西安市文物保護考古所ほか『長安漢墓』陝西人民出版社、2004。
- 6) 註2文献。
- 7) 山西大学歴史文化学院ほか『大同南郊北魏墓群』科学出版社、2005。
- 8) 魏建鋼『越窯制瓷史』中国社会科学出版社、2015の100、135-139頁。
- 9) 福建博物院『福建政和県発現東漢晚期至三国時期窯址』『南方文物』2013-4、2013。
- 10) 福建省博物館・福州市文物管理委員会『福州懷安窯址発掘報告』『福建文博』1996-1、1996。